抱きしめられる日まで

京都・舞鶴 コロナ下の新生児集中治療室

保育器に入る澪海ちゃんとオンライン面会する西岡美香さん

低体重で生まれた赤ちゃんが入院する新生児集中治療室（NICU）。新型コロナウイルスの感染予防策として面会を制限する医療機関も多く、京都府北部の新生児医療を担う国立病院「舞鶴医療センター」（舞鶴市）もその一つだ。赤ちゃんの命を守り、家族を支えるために苦闘する医療スタッフの姿があった。

「頑張ってるね。みんなで待ってるよ。」昨年暮れ、双子の翔大ちゃん、奏音ちゃんを出産したばかりの宮森梨帆さん（32）は、保育器内の我が子へ優しいまなざしを向けた。妊娠21週から早産の兆候があった宮森さんは、約2カ月の入院を経て31週で出産。2人の体重はそれぞれ1600グラムほどで、そのままNICUへ入院した。

舞鶴医療センターでは新型コロナウイルスの感染予防としてすべての診療科で面会謝絶とし、NICUでは母親以外の面会を原則断っている。入院が続いた宮森さんは家族にも会えない不安の中で出産。2人の赤ちゃんに触れることも制限され、「自分の努力でどうにかできることでもなく、歯がゆい」と話す。宮森さんはその後退院し、週1回の面会制限が続いている。「コロナの面でNICU内は安心だけど、毎日会えないのは寂しい」

面会の制限は医療スタッフにとっても苦渋の選択だ。小児科の瑞木匡医師（37）は「お母さんには赤ちゃんに触れて、日々の成長を感じてほしいんです」と話す。

本来、親子の触れ合いは両親の常在菌を子にうつす効果があり、子への愛着形成のためにも必要な行為。産後から入院生活を送る低出生体重児は親の愛着形成が起きにくく、虐待につながる可能性も指摘され、「面会の制限でその危険性が高まるのでは」と懸念する。

少しでも赤ちゃんと両親の力になろうと、看護師らによる工夫も。昨年9月に帝王切開で次男澪海ちゃんを出産した京丹後市の西岡美香さん（33）は週2回、看護師の発案で始まったオンライン面会を利用した。妊娠22週で生まれた澪海ちゃんの体重は496グラムで、数日後には小腸が破裂し、緊急手術で一命を取り留めた。

「なんで元気に産んであげられなかったんだろう。もっとそばにいてあげたい」。西岡さんはそんな思いが募る中、スマホの画面に映る澪海ちゃんの姿が心のよりどころになった。親身に相談に乗ってくれる看護師らにも励まされ「大変な時期を支えてもらいました」と感謝する。

「限られた資源と人材を工夫し、患者とその家族の支えになれれば」と瑞木医師。続くコロナ禍の中、小さな命を守り続けている。

写真・文 猪飼健史

（すべて京都府舞鶴市で昨年12月に撮影）

保育器に入る双子の兄翔大ちゃん（手前）をいとおしそうに眺める宮森梨帆さん。右奥は妹の奏音ちゃん。新型コロナウイルス対策で触れることも原則禁止されている

上医療スタッフによってお風呂に入れてもらう佐々木詩織さん（30）の次女美実ちゃん。よく寝てよく食べるマイペースな性格で、すくすくと育っている 下三つ子で生まれ入院した（左から）彩来ちゃん、美実ちゃんをなでる佐々木さん。面会は週1回、母親のみに制限され、抱いてあげることもできない。退院が近づき、ようやく触れてあげることができた

入院している赤ちゃんの成長記録を書く看護師。家族の面会機会が減る分、以前よりも詳細に記録するようになった

帝王切開で取り出された新生児を処置する瑞木医師

もっと知りたい

新型コロナウイルスに感染した妊婦を帝王切開し新生児を取り出す場合を想定した訓練で、手術室から保育器を運ぶ医療スタッフ